

## 【舌学ノート】誕生記

江戸ソバリエ認定委員長  
ほしひかる

### 【舌学ノート】

正岡子規に『果物帖』というエッセイがある。



正岡子規『果物帖』

これが江戸ソバリエ認定講座の舌学ノートのヒントになったことは何かに書いたり、また話したりしたことがある。

その『果物帖』には、くだものの言葉の由来は古語のくだす(塾する)ものだから、果物の色や香、鑑定についてまで述べ、実際には崖の上で木苺、山の中で桑の実、道傍で茱萸、宿で御所柿を食べたことを詳しく記録している。

今まで私は、こういうのを見たことがなかった。

こういうのというのは、理科系の百科事典的なものは見たことがあるが、文科系のエッセイ風の記録は見たことがないという意味である。そして前者にはないが、後者には時代背景などの濃い情報が入っていることに気付いた。

たとえば子規は、崖の上で木苺、山の中で桑の実、道傍で茱萸でむさぼり食い、そして宿では山ほど持ってきてくれた御所柿を食べたと述べているが、この文から私は昔の光景が見えてきた。

少年のころの私が食べた果物は、蜜柑、梨、西瓜、柿、枇杷、無花果などだったと思う。故郷の有明海沿岸は蜜柑王国だから、蜜柑業界は商売として成り立っていた。だからだいたい八百屋屋(当時は果物屋というのはなかった。)で段ボール箱で購入し、いつでも冬の廊下の隅に置いてあったから、食べたいときに食べていた。夏の西瓜や秋の梨も基本的には八百屋だった。

しかし、柿、枇杷、無花果は店で買った記憶があまりない。子規の行為同様に、ほとんど庭の木からもぎった物のお裾分けみたいにして頂いていたと思う。

そして現代よく流通している林檎や桃や葡萄は地域柄あまり食べたことがなかった。当時高級だったメロンなんて遠い存在であった。ただ、こうした記憶が小学校のころなのか、中・高等学校のころなのかは定かではないから、多少の時代差があることは否めない。

いずれにしろ、私の代の戦後だって、子規の代の明治だって、流通する果物は現代より少なかったことは間違いない。ましてや江戸時代は何をかいわんやである。それでも言えることは、**流通にのっている果物**と**のっていない果物**があったということである。

そうした時代背景が子規の『果物帖』にはある。

そこにズンときて、**舌学ノート**なるものを考案したわけである。

江戸ソバリエは、蕎麦店が廃れば蕎麦文化は滅びるという思いから、**蕎麦屋さんを応援する会**と位置づけている。だが、このことを掲げているのは『蕎麦春秋』誌の「**そば店に行こう!**」の他に見当たらない。

蕎麦好きなら、もっと蕎麦屋さんを応援しよう。

その際の舌学ノートは蕎麦屋巡りのフィールドノートと考える。

※ 江戸蕎麦めぐり = 舌学ノート

以上